

資料紹介

橘井桁紋付弓籠手

当館蔵

弓籠手は、弓を射るときに使用する肩から腕を覆う布または革製の道具で、着物の袖が弓弦に当たるのを防ぐものです。写真のように肩全体を覆うものは、狩や流鏑馬などのときに着用しました。

写真の弓籠手は、彦根藩井伊家に伝わったものです。絹を織った艶のある朱色の生地に、井伊家の家紋である丸に橘紋と井桁紋を金箔で表し、縞状に置かれた草花文には銀箔を用います。朱色に金銀の箔が映え、華やかな印象を受けます。

この弓籠手に用いられている彩色のうち、地の朱色と家紋の金色という組み合わせは、「井伊の赤備え」と通称される朱色の甲冑に金色の兜の装飾を付けた姿を彷彿とさせます。制作した際にも、それを意識していたのかもしれませんが。

また、家紋の配置も特徴的で、橘紋は前面と背面に一つずつ入れますが、井桁は袖山を活かして半分に折るように表します。井伊家伝来品には、同様の構図を取り入れた弓籠手が三手確認でき、橘紋の一部にわずかな差異があることから、異なる制作時期のものと考えられます。単純に家紋を並べるのではなく、あえて井桁に変化を加えた構図を選択し、それが繰り返し使用されてきたことは、注目すべき点といえるでしょう。

(古幡昇子)

テーマ展

1/29(金)
12/22(日)

展示室1

橘と井桁 — 彦根藩主井伊家の家紋 —

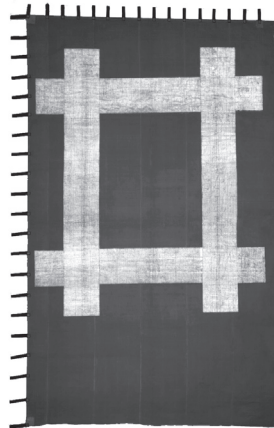
彦根藩主井伊家は、「丸に橘」と、井の字を直線化した「井桁」を家紋として用いました。

武家の家紋は、旗印の図柄が起源といわれます。早い時期のものは、形が一樣ではなく、定型化が進むと同時に、装飾も加えられたようになります。

本展では、橘と井桁があらわれた品々を紹介いたします。形の違いをはじめ、さまざまに意匠化された家紋をじっくりご覧ください。



金箔押橘形馬印



朱地井桁紋纏

テーマ展

1/1(祝)
1/28(火)

展示室1

湖東焼 — 鳴鳳と赤絵金彩 —

文政十二年(一八二九)、古着商を営む絹屋半兵衛が彦根で始めたやきものは、天保十三年(一八四二)に彦根藩が窯を召し上げて直営化し、井伊家十二代直亮と十三代直弼のもとで大いに発展することとなりました。このやきものは、後に湖東焼と呼ばれるようになりました。

湖東焼は、藍色で模様を表現した染付や、青緑色で全面を彩色した青

磁、赤や緑などの色で絵付した色絵、金で彩った金彩など、様々な技法によって制作されました。なかでも、赤と金で絵付した赤絵金彩の作品は、絵付師鳴鳳や幸齋、自然齋、床山などの作が知られ、多様で華やかな魅力に満ちています。本展では、湖東焼きつての名絵付師として知られる鳴鳳を中心に、赤絵金彩の優品を紹介します。



赤絵金彩昔雁図水指

- ギャラリートーク
- 日時 1月11日(土) 14時～
- 講師 奥田 晶子(当館学芸員)

● 入門講座 ●

美術編 第2回 湖東焼の魅力

「手に取るように分かる鳴鳳の水指」湖東焼の絵付師鳴鳳の名作、赤絵金彩昔雁図水指を取り上げ、その魅力を解き明かします。

■日時 1月18日(土) 14時～14時50分

■講師 奥田 晶子(当館学芸員)

■会場 当館講堂、展示室

■資料代 100円※別に観覧料が必要です。

■定員 25名

■申込方法

往復はがき往信の裏面に、住所・氏名・電話番号を、復信の宛名面に住所・氏名を明記の上、「入門講座美術編係」までお申し込みください。(定員を超えた場合は抽選)。

■申込期間 12月1日(日)～20日(金)

■当日消印有効

歴史編

彦根藩の歴史 — 井伊家と家臣たち —

江戸時代の彦根藩政は、井伊家の家臣である彦根藩士が担い、一部の町人もこれに関わっていました。また、藩主井伊家の家族・一族も藩の中で一定の役割を持っていました。本講座では、彦根藩政に関わった人々の全体像をまとめて紹介します。

■日程・内容・講師

2月8日(土) 13時～15時50分

第1講 「井伊家の人々」 学芸員 野田 浩子

第2講 「藩士」 学芸員 青木 俊郎

第3講 「足軽と町人代官」 学芸員 渡辺 恒一

※各講50分で行います。途中10分間の休憩を挟みます。1講のみの受講も全講通しての受講も可能です。

■会場 当館能舞台見所

■資料代 300円(彦根市内の中学生以下は無料) ※1講のみ受講の場合も同額です。

利用案内

■開館時間

8時30分～17時

※入館は16時30分まで

■休館日

12月25日(水)

31日(火)

※このほか、展示替のため一部休室するところがあります

■観覧料

一般500円

小・中学生250円



●●常設展示●●

“ほんもの”との出会い

—彦根藩井伊家伝来の大名道具を中心に80点あまりを展示—

展示室2～3、5～6



催し



特別公開

1/31(金)
3/4(火)

展示室1

雛と雛道具



弥千代の雛道具のうち
三棚と駕籠

江戸時代、大名家では、姫君の婚礼に際して、調度や雛道具などの道具一式を調べて婚家に持参する慣わしがありました。安政五年(二八五八)、井伊家十三代直弼の息女弥千代(二八四六〜一九二七)が、高松藩松平家世子頼聡に嫁いだ際にも、大揃えの婚礼調度と、雛と雛道具が調えられました。雛は、紙製の衣装をまとい、丸顔に引目鉤鼻を描いた愛らしい立雛です。雛道具は、婚礼調度の精巧なミニチュアで、井伊家の家紋である橘紋と松竹梅の

模様が表わされています。本展では、弥千代の雛と雛道具を中心に、弥千代の婚礼調度として調べられた駕籠、地元の旧家に伝えられた古今雛や御殿飾りを、一挙に公開します。



弥千代の雛道具(部分)

- ギャラリートーク①
- 日時 2月1日(土) 14時
- 講師 奥田 晶子(当館学芸員)

テーマ展

3/7(金)
4/8(火)

展示室1

直弼発見!

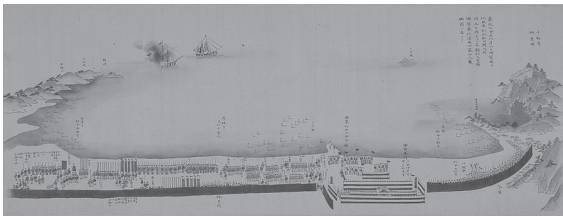
井伊直弼と相州警衛

弘化四年(一八四七)二月、来航相次ぐ外国船への対策として、江戸幕府は彦根藩に対して相模国三浦半島の海岸警備を命じました(相州警衛)。彦根藩の相州警衛は、警備地が変更となる嘉永六年(一八五三)十一月までの約七年にわたり続けられました。

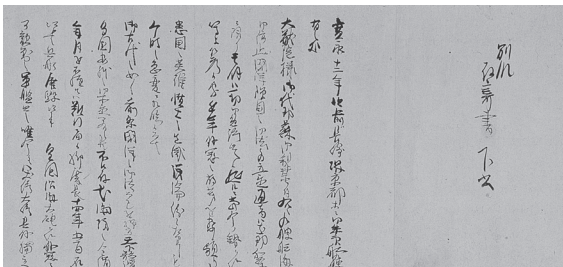
警衛を拝命した当時、世継(次期藩主)の身分であった直弼は、嘉永

三年十一月に藩主となったことで、警衛を指揮することとなります。この展示では、長期間にわたった彦根藩の相州警衛の様子と警衛に対する直弼の思い、そして直弼の対外政策に関する考えを紹介します。

- ギャラリートーク②
- 日時 3月8日(土) 14時
- 講師 青木 俊郎(当館学芸員)



ベリー浦賀来航図



別段存書下書

- 定員 125名
- 申込方法

往復はがき往信の裏面に住所・氏名・電話番号を、復信の宛名面に住所・氏名を明記の上、「入門講座歴史編係」までお申し込みください。彦根城博物館ホームページからも申し込みできます。(定員を超えた場合は抽選)。

- 申込期間 平成25年12月1日(日)〜平成26年1月24日(金) 当日消印有効

スケジュール

12月

14土 古文書のみかた⑥

25水〜31火 休館

テーマ展
橘と井桁
彦根藩主井伊家の家紋
11/29〜12/22

12/23・24
展示替により一部休室
12/25〜31 休館

1月

11土 「湖東焼
「鳴鳳と赤絵金彩」
ギャラリートーク

18土 入門講座 美術編②

テーマ展
湖東焼
「鳴鳳と赤絵金彩」
1/1〜1/28

1/28〜30
展示替により一部休室

2月

8土 入門講座 歴史編

1土 「雛と雛道具」
ギャラリートーク

特別公開
雛と雛道具
1/31〜3/4

3月

8土 「直弼発見」
ギャラリートーク

テーマ展
直弼発見!
井伊直弼と相州警衛
3/7〜4/8

3/5〜6
展示替により一部休室

*「古文書のみかた」は事前申込制です。
*新年は1月1日から開館します。

金亀玉鶴



絵師・張月樵の画風

当館は、平成二十四年度、彦根出身でももに名古屋で活躍した江戸時代中後期の絵師、張月樵の作品を購入しました。

彼の動向が知れる一次資料は多くはなく、生涯のまとまった記述としては、管見の範囲では、明治二十一年（一八八八）の『扶桑画人伝』が最も古く、『中京画壇』、『名古屋市史 学芸編』、北村寿四郎『近江人物志』、『名古屋市史 人物編第一』、『新編愛知県偉人伝』等がこれに続きます。

これらの記述の概略は、以下の通りです。張月樵の出生は、安永元年（一七七二）（ただし明和二年一七六五年の説もあり）、地は彦根城下の職人町、父は表具屋総兵衛でした。京に出て、同じ藩領内の坂田郡醒ヶ井村出身の市川君圭、後に松村月溪（後の呉春一七五二〜一八一二）に学びました。月樵の号は、師の号から一字をいただいたものといえます。寛政十年（二七九八）、円山応挙の高弟の長澤蘆雪（二七五四〜九九）と東国に遊歴しようとして出立するも、岐阜で袂を分かち、独り名古屋に入りました。桜之町霊岳院に寓居し、後に地元（の山田）宮常の画才を慕い、遺族に親しんで元明画を中心とする遺墨粉本を借りて臨模し、宮常の旧居を継ぎました。天保三年（一八三二）六月二十二日、六十一歳（一説に六十八歳）で没し、名古屋の長栄寺に葬られました。

ここで、購入作品の「蔡文姫帰漢図」を見てみましょう。本作は、中国の故事に取材したもので、天下混乱

の中、後漢の蔡文姫が、さらわれて南匈奴の左賢王の妻となつて二人の子を産み、後、父と親しかった武將の曹操（後の武帝）の助けによって帰郷することができたという話で、このうちの帰郷の場面を描いています。天地が四十五センチという大ぶりの絵巻で、そこに描かれた三十センチはある大きくデフォルメされた人物は、初めて見る者に強烈な印象を与えます。

この異様とも言える画風はどこから来るのでしょうか。土坡や樹木の表現は、蕪村風の南画の影響が強くうかがえます。人物の顔貌表現は極めて特色があり、左右の目は極端に離れ、口は鼻に接するほど近く、顎が極端に長く表されます。衣文線は勢いよく、大仰気味。陰影の調子がきついいことからも、一見すると中国画の直接的な影響下で描かれたものかとも思われますが、人物表現の型は、円山応挙を源流とする円山四条派の範疇に入るものと言えるでしょう。デフォルメしても破綻を感じさせないのは、応挙式の本格的な写生の学習をしたためでしょうか。

『扶桑画人伝』に「長澤芦雪ト親シク交リ信ジテ其風ヲ得タリ」とあるように、月樵の画は、円山四条派の中でも特に蘆雪の画に通じるところが大きいと思われまます。蘆雪は、師である応挙の人物画の型を受け継ぎつつも、のびのある洒脱かつ機知あふれる画を世に送り出しました。この延長線上にあるのが月樵の画と言えるでしょう。蘆雪画に見られる柔らかみや潤いは薄れています。

そもそも月樵の師の呉春は、初め大西酔月に師事した後、与謝蕪村の門に転向して明清画も取り入れた蕪村風の画風となり、蕪村亡き後は応挙風の写生的で平明な画風に転向するなど、実に多様な画風を展開しています。さらには、既述の通り、月樵は名古屋時代に元明の画を臨写したといえます。一体月樵は、いつ、どのような画風を身につけ、展開させていったのかは、

霧の中です。当時の混沌とした画壇の中にあつてはその解明は困難でしょうが、今後、多くの月樵作品が見いだされ、編年されることにより徐々に明らかになって行くことでしょう。

様々な画風を身につけたであろう月樵ですが、基本はあくまでも若くして学んだ円山四条派とそれに関連した蕪村風南画の画風であつたと思わせるのが、文化十四年（一八一七）に刊行された『不形画藪』の存在です。所収の三十一の月樵画の多くが、円山四条派の範疇に入ると捉えてよく、特に花鳥画にその傾向が顕著です。「蔡文姫帰漢図」同様、人物のデフォルメは

大きながらも破綻がありません。そして、山や樹木表現はやはり同様に蕪村風の南画体です。時に月樵は四十六歳、既に種々の画を学んであるう齡でした。

十分な実力を伴い、人気のあつた絵師だつたにもかかわらず、月樵の本格的な研究がされてこなかったのは、主な活躍の場である名古屋が出身地でなかったためでしょうか。今後、総合的な調査研究が行われ、正当に評価されることを期待するところです。（高木文恵）



蔡文姫帰漢図（部分）張月樵筆 当館蔵



彦根城を世界遺産に

彦根城はユネスコの世界遺産暫定リストに登録されており、世界遺産をめざしています。

編集・発行

彦根城博物館

〒522-0061 滋賀県彦根市金亀町1番1号

TEL 0749(22)6100 FAX 0749(22)6520

http://longlife.city.hikone.shiga.jp/museum/

この印刷物は8000部作成し、印刷単価は6円です。